

研究報告

子育てサークルに参加する母親が行う情報の判断

How mothers who participate in parenting groups judge information

岡本 静佳 (Shizuka Okamoto)*
西田 朋代 (Tomoyo Nishida)**
宮地 純礼 (Sumire Miyaji)**

中尾 美和 (Miwa Nakao)**
福島 怜美 (Satomi Fukushima)****
石川 麻衣 (Mai Ishikawa)*****

要 約

母親がどのように子育てサークルで情報の判断を行っているかを明らかにすることを目的に、子育てサークルに通っている母親6名にインタビューを行い、質的統合法(KJ法)で分析した。その結果、母親が情報を判断するための具体的な行動のあり様は、【子育てのことにについて勉強したいという気持ちによる地域から発信される子育て情報の注視】、【インターネットで迷った情報は、子育て経験豊富な母親に聞き、納得や信頼できるものを選択】、【子育ての多忙さや疲労感がある中でも意外性や印象に残っているものは記憶】、【子育てサークルで話題にしたり感想を話し合ったり助言を得ながら少しずつ解決していこうという思い】、等の6つに集約された。これをもとに、子育てサークルに参加する母親が情報を判断する力を高めるための支援を、母親、母親同士、家族、地域の4つの視点で考察した。

キーワード：子育てサークル 子育て 母親 情報

I. はじめに

少子化が進み核家族化が進む¹⁾現代、これまで母親以外の家族や親族、地域社会に分散していた子育ての役割が、母親一人に集中する傾向がある²⁾。このような社会背景が子育ての孤立に大きな影響を及ぼして³⁾おり、子育て中の母親は、他者に頼ることができず、子育ての悩みを自らの力のみで情報を判断することによって解決しなければならぬという現状におかれている。そこで、母親には、必要性の高さや有用性を個別性に鑑みて判断する能力⁴⁾が求められている。

こうした能力を高めるためには、母親同士のつながりや、専門職とのかかわりを持つ機会が必要である。しかし、現在の社会状況では、母親が自然なつながりを持つことは困難で、経験等に基づいた情報は得られにくい。マス・コミュニケーションで得た情報は一般的なもので個別性という観点から見ると母親にとって的確なものであるとは言い難く、メディアを批判的に見

ることが求められている昨今、根拠のある確実な情報が必要である。そのような中、地域で母親同士のつながりができ、子どもの遊び場の提供、子育てに関する情報提供、相談支援の実施に結び付けることが可能である子育てサークルは、先行研究により子どもの社会性の形成のきっかけになることや子育て満足度を高めるなどの効果があることが明らかにされ、情報が行き交いかつ相談ができる環境が整っている²⁾⁴⁾。人々が継続的に集まる機会が限られてきている現代社会において、母親同士で支え合える子育てサークルは、ネットワークを形成するいい機会になっている。よって、氾濫する情報の中で、必要性の高さ・有用性を個別性に鑑みて判断する能力は、子育てサークルで高められると考えた。

公衆衛生看護活動では、母親一人に子育ての役割が集中し孤立することを防ぎ、家族・地域・社会の中で子育てに協力し母子にとって暮らしやすい地域とすること、また地域で生活する人々がそれぞれの力を発揮すること、そしてその実

*幡多福祉保健所
****佐川町役場

**飯塚病院
*****高知県立大学看護学部

***高知大学医学部附属病院

現に地域の人々が連なり参画する地域となることを目指す⁵⁾。この実現のために看護職は乳幼児とその母親に様々な事業を通して直接的な働きかけや環境調整等を行っている。これらの活動は子育ての孤立化が進み情報が溢れている現代で、母親が子育てにおいて必要とする情報を判断できる能力を高めることにつながっていると考える。しかし先行研究⁶⁾では、認知症等特定の対象における判断の過程や情報を提供したり環境を整えたりするといった支援の知見は得られているが、子育てサークル内における母親の情報の判断については明らかにされていない。よって、母親の判断に至る実際が明らかになれば、看護職が地域で看護を展開するにあたって母親が主体的に情報を判断するための支援の方向性を得ることができると考えた。

以上より、多くの情報を得た母親が、子育てサークルでどのように情報の判断を行っているかを明らかにすることで、母親が情報を判断する力を高められるよう支援するための手がかりになる看護への示唆を得ることを目的に本研究を実施した。

II. 研究の枠組み

判断はきわめて感覚・知覚的なものから、知識・経験に基づく高度なものまでを含む多様な精神作用である⁷⁾。判断に必要な4つの機能的な能力として、内ヶ島⁸⁾は、「自分の状態を認識できる能力」「説明された情報を理解する能力」「自分の希望を表明する能力」「自分の希望を理論的方法で評価できる能力」を挙げている。サイモン⁹⁾の意思決定モデルによると、判断におけるプロセスはインテリジェンス活動、設計活動、選択活動、過去の選択の再検討の4つの活動が順次行われる⁹⁾。インテリジェンス活動とは、判断が行われる際の問題認識の段階を示している。設計活動とは、インテリジェンス活動で認識した問題を解決するもしくは、代替案を探索したり新たに設計したりする段階を示す。選択活動とは設計活動の段階で意思決定者が設計した何種類かの代替案を比較検討、評価して選択する段階である。再検討活動とは、過去の選択を再検討するものである。再検討は次の情報の

判断にフィードバックされると考える。ここで行われる再検討が母親同士で情報を交換し合う子育てサークル内に持ち込まれた場合、他の母親の判断にも影響を与えると見える。

判断に必要な4つの機能的な能力と意思決定モデルより、母親の子育てサークルでの判断を、情報収集・情報の解釈・情報の処理の3つの段階からなるものとして捉える。

III. 用語の定義

子育てサークル：子育てをしている子どもを連れた母親達が子育て仲間を得て育ち合う関係を作り出す集まり。子育てサークルには、行政主催型子育てサークルと自主型子育てサークルが存在する¹⁰⁾。

子育てサークルにおける情報収集：母親達が子育てサークル内で情報を集めること、または情報が集まること。マス・コミュニケーションや人的資源から得た情報をサークル内に持ち寄りサークル内で母親同士が話し合ったり、相談したり交換しながら情報を得ること。また掲示物・配布物等から子育てサークルという場だからこそ得られる情報を集めること。

子育てに関する情報：子どもの成長に関すること、母親の養育に関すること、サークルの行事・活動に関すること等の子育てに関するデータのなかで自分にとって関係のあるもの。

子育てに関する情報の解釈：楽しそう・簡単そう等の感覚を大切にしたり、情報の信憑性の高さ、または知識・経験によって得た情報を母親がサークルで他の母親に相談したりすることによって、子育てに関する情報を理解すること及び深化させること。

子育てに関する情報の処理：子育てに関する既存の情報を加工することでより付加価値の高い情報を新たに生み出したり、選択肢が自分には適当でないと考える時それを消去したり、適当と考えられる単数または複数の選択肢を自分が使いやすい形に構成すること。

母親の行う情報の判断：母親が子育てに関する情報で得た情報を理解し自分の考えをこうだと決めること、また内容を自分が使いやすいように構成すること。

IV. 研究方法

1. 研究デザイン：質的帰納的研究
2. 研究対象：未就園児をもち、子育てサークルに通っている母親
3. データ収集期間：2014年8月～9月
4. データ収集方法：半構成的インタビューガイドに基づき、30分程度のインタビューを行った。日常的な判断は意識せずに行う場合が多いと考えられるため、情報の判断に関わる具体的な話を引き出せるよう、母親による子育てサークルの最近の情報の判断のエピソードを聴取した。対象者の了解が得られれば録音し、了解が得られなければメモをとり記録した。
5. 分析方法：質的統合法 (KJ法)¹¹⁾を用いて行った。インタビュー終了後に逐語録を作成し、その中から母親の語りを内容ごとに区切りながらラベルを作成し、データの主張する内容を類似性に着目して似たラベルごとにグループ化することで個別分析を行った。それぞれ集めたラベルの全体感からそのグループの内容を表すような文を考え、それを表札として記述した。この作業を何度か繰り返し最終的に5～6個のラベルに集約した。次に、個人分析の2段階目のラベルを集め、個人分析と同様に分析を行った。最終ラベルに、内容を端的に表すシンボルマークを付け、ラベル間の関係性を読み取りながら空間的に配置することで、子育てサークルで母親が行う情報の判断のあり様を全体像として示した。
6. 倫理的配慮：高知県立大学看護学部倫理審査委員会の承認を得て実施した。子育てサークルを運営する施設に、研究の目的、方法、プラ

イバシーの配慮、研究参加の自由意志の保障、子どもの安全への配慮、研究結果の公表の仕方について説明を行った上で研究協力を依頼し、承認を得た。その後、対象者に同様の内容を説明し、書面にて同意を得た。

V. 結果

1. 対象者の概要

対象者は、A市の子育て相談事業参加者3名、B市のC地域子育て支援センター参加者3名の計6名であった。

A市は人口約30,000人、出生率5.8であった。A市で月に1回取り組まれている子育て相談事業は、A市在住の乳幼児とその母親を対象に身体測定や保健師・栄養士・歯科衛生士による子育て相談が開催されていた。会場のスペースは広く、母親は子どもを遊ばせながら身体測定や子育て相談の合間に母親同士で話をしていった。

B市は人口約350,000人で、出生率8.5であった。C地域子育て支援センターは市の中心部から少し外れた住宅地の保育園に併設されていた。に3回未就園児とその母親を対象とした親子のふれあい遊びや職員による子育て相談等の活動が開催されており、1日10組程度の親子が参加していた。

2. 子育てサークルで母親が行う母親の情報の判断

個別分析でグループ化を行った2段階目のラベル53枚のグループ化を行った結果、最終ラベル6枚に集約された。文章中のシンボルマークは【 】、最終ラベルは《 》で示す。

表1 対象者の概要

対象者	子どもの人数(年齢)	家族内の子育て支援者	子育てサークルの参加回数(期間)
A氏	1人(9か月)	夫、実父母	3回程度
B氏	1人(8か月)	夫、義父母	6～7回
C氏	1人(10か月)	実父母、義父母	5回程度
D氏	2人(2歳、3か月)	夫	2～3回程度
E氏	1人(1歳)	夫、実父母、姪	週2～3回(参加期間:5か月)
F氏	2人(5歳、2歳)	義母	週1～2回(参加期間:5年)

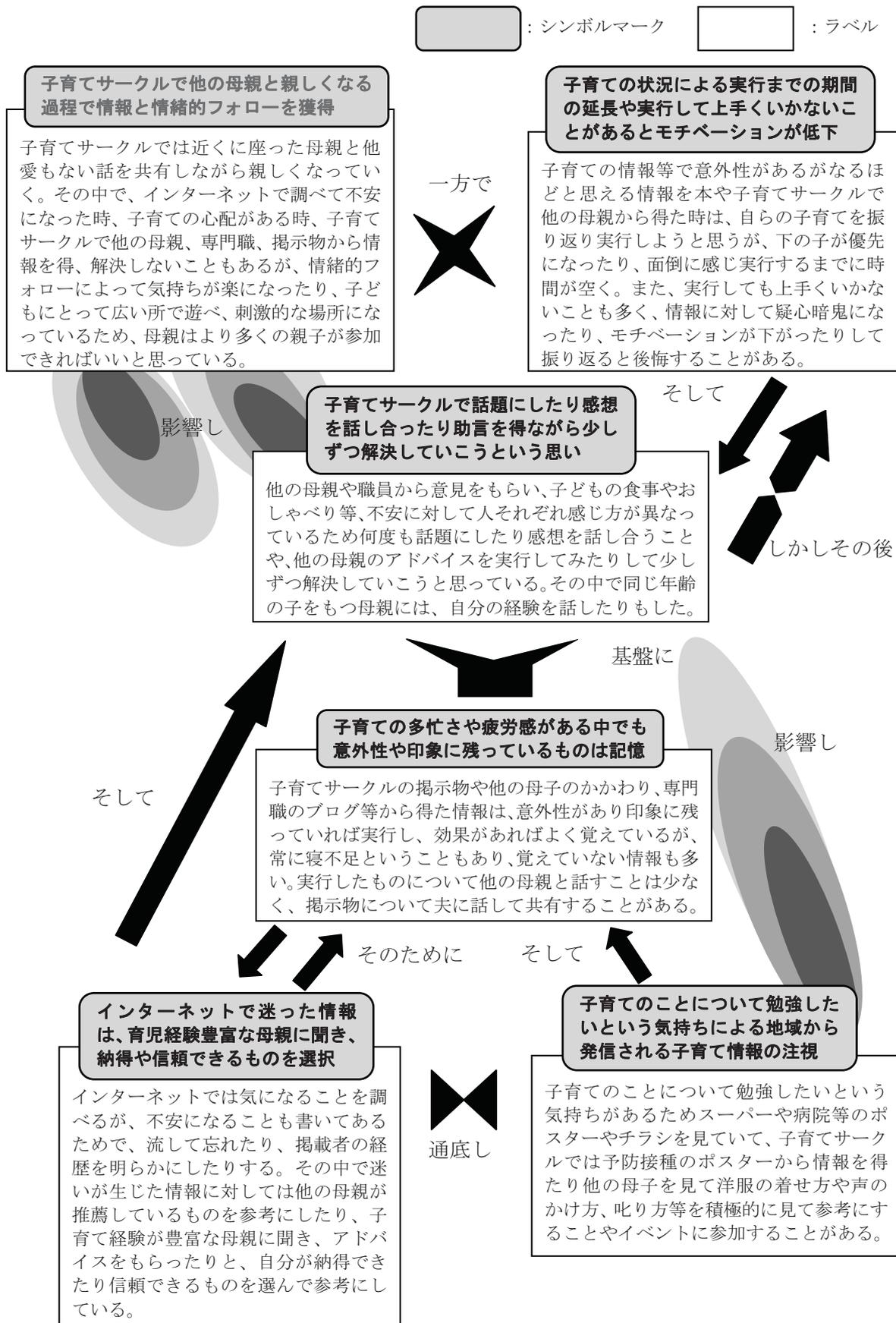


図1 子育てサークルに参加している母親の情報判断のシンボルマークと最終ラベル

母親は、普段から【子育てのことについて勉強したいという気持ちによる地域から発信される子育て情報の注視】、【インターネットで迷った情報は、子育て経験豊富な母親に聞き、納得や信頼できるものを選択】という方法で子育ての情報を収集していた。そして【子育ての多忙さや疲労感がある中でも意外性や印象に残っているものは記憶】していた。

このようにして得た情報は【子育てサークルで話題にしたり感想を話し合ったり助言を得ながら少しずつ解決していこうという思い】によって、さらなる情報収集を行ったり、得た情報を使いやすい形に発展させていた。しかし、その後【子育ての状況による実行までの期間の延長や実行して上手くいかないことがあるとモチベーションが低下】することがあり、解決は少しずつでいいという思いを強めていた。その一方で【子育てサークルで他の母親と親しくなる過程で情報と情緒的フォローを獲得】しており、母親同士の関係性が深まることで、少しずつ解決していこうという母親の前向きな思いが強められていた。

以下、各最終ラベルについて説明する。

1) 【子育てのことについて勉強したいという気持ちによる地域から発信される子育て情報の注視】

このシンボルマークは、《子育てのことについて勉強したいという気持ちがあるためスーパーや病院等のポスターやチラシを見ていて、子育てサークルでは予防接種のポスターから情報を得たり他の母子を見て洋服の着せ方や声のかけ方、叱り方等を積極的に見て参考にすることやイベントに参加することがある》という最終ラベルを表したものである。

これは、子育てはわからないことが多いため、スーパーや病院で子育ての講座やイベントの情報を見てできる限り参加するようしたり、子育てサークルが発信している、人それぞれ異なる声のかけ方や、季節や発育に合わせた洋服の選択、予防接種等の情報を見て参考にしたりしているという内容であった。

2) 【インターネットで迷った情報は、子育て経験豊富な母親に聞き、納得や信頼できるものを選択】

このシンボルマークは、《インターネットでは気になることを調べるが、不安になることも書いてあるため流して忘れてたり、掲載者の経歴を明らかにしたりする。その中で迷いが生じた情報に対しては他の母親が推薦しているものを参考にしたり、子育て経験が豊富な母親に聞き、アドバイスをもらったりと、自分が納得できたり信頼できるものを選んで参考にしている》というものを表している。

これは、インターネットの情報は安易に信じず、掲載者を明らかにする等し、その中で迷いが生じた情報に対しては子育て経験が豊富で信頼できる他の母親に聞いて、子どもの月齢も考慮しつつ自分が納得できるものを選択し、うのみにしないという内容であった。

3) 【子育ての多忙さや疲労感がある中でも意外性や印象に残っているものは記憶】

このシンボルマークは、《子育てサークルの掲示物や他の母子のかかわり、専門職のブログ等から得た情報は、意外性があり印象に残っていれば実行し、効果があればよく覚えているが、常に寝不足ということもあり覚えていない情報も多い。実行したものについて他の母親と話すことは少なく、掲示物について夫に話して共有することがある》というものを表している。

この最終ラベルは、自身が悩んでいることを他の母親に聞いたり、専門家のブログから情報を得て、意外性があったり印象に残っているものはやってみるが、子育ての多忙さや大変さから、掲示物を見てもあまり覚えていないものも多い。そして、得た情報を家庭に持ち帰り家族で共有する。また、子育てサークルでは過去に実行した経験を話すことは比較的少なく、今気になっていることや現在の子どもの様子に即したことの話題が多いという内容であった。

4) 【子育てサークルで話題にしたり感想を話し合ったり助言を得ながら少しずつ解決していこうという思い】

このシンボルマークは、《他の母親や職員か

ら意見をもらい、子どもの食事やおしゃべり等、不安に対して人それぞれ感じ方が異なっているため何度も話題にしたり感想を話し合うことや、他の母親のアドバイスを実行してみて少しずつ解決していこうと思っている。その中で同じ年齢の子どもをもつ母親には、自分の経験を話したりもした」というものを表している。

これは、過去に子育てサークルの母親や職員から子どもの食べ物の情報や便利な道具を勧められ、実際にやってみると役に立った経験や、自分の悩みに対して他の母親や職員から意見をもらった時に、人それぞれ感じ方が異なっていると感じた経験によるものである。よって他の母親等のアドバイスを積極的に受け入れ実行してみたり、自分が気になったことは何度も話題にしたりして、少しずつ解決していこうという思いとなっているという内容であった。

5) 【子育てサークルで他の母親と親しくなる過程で情報と情緒的フォローを獲得】

このシンボルマークは、《子育てサークルでは近くに座った母親と他愛もない話を共有しながら親しくなっていく。その中で、インターネットで調べて不安になった時、子育ての心配がある時、子育てサークルで他の母親、専門職、掲示物から情報を得、解決しないこともあるが、情緒的フォローによって気持ちが楽になったり、子どもにとって広い所で遊べ、刺激的な場所になっているため、母親はより多くの親子が参加できればいいと思っている》というものを表している。

これは、顔見知りの母親や職員が多く気軽に相談することで、今のままでいいとわかることや、解決できなくても相談相手がいるということで気持ちが楽になるという面があるからである。また家では子どもが限られたスペースでしか遊べず目が離せないが、サークルでは広い空間で遊べ、少し目を離しても職員や他の母親の見守りがあるため安心できる。そして、そのような場所に地域の母子の全員が参加できているわけではないため、より多くの人に参加できるようになればいいという内容であった。

6) 【子育ての状況による実行までの期間の延長や、実行して上手くいかないことがあるとモチベーションが低下】

このシンボルマークは、《子育ての情報等で意外性があるがなるほどと思える情報を本や子育てサークルで他の母親から得た時は、自らの子育てを振り返り実行しようと思うが、下の子が優先になったり、面倒に感じ実行するまでに時間が空く。また、実行しても上手くいかないことも多く、情報に対して疑心暗鬼になったり、モチベーションが下がったりして振り返ると後悔することがある》というものを表している。

子育ての情報や子どもへの話しかけ方等、意外性があるが納得できる情報を得た時に、実行しようと思える時は以下の2つであった。1つ目は自らの子育てを振り返り、今やっている方法が満足できないと評価した時である。2つ目は新しく得た情報の方がよりよい方法であると考えられる時であったが、他のきょうだいの子育ての状況等ですぐに実行することは難しいことも多々ある。また実行して上手くいかなかった時は、モチベーションが下がったり後悔したりして、前に自分がやっていた方法に戻るといった内容であった。

VI. 考 察

1. シンボルマークの関係性からみた子育てサークルにおける母親の情報の判断

1) 地域・家庭での信頼でき役立つ情報の収集

【子育てのことについて勉強したいという気持ちによる地域から発信される子育て情報の注視】、【インターネットで迷った情報は、子育て経験豊富な母親に聞き、納得や信頼できるものを選択】、【子育ての多忙さや疲労感がある中でも意外性や印象に残っているものは記憶】という3つのシンボルマークには、より信頼でき、役に立つ情報を集めたいという共通の思いが含まれていた。母親たちは社会から孤立しがちな生活だと感じており、だからこそ、子育ての情報収集に意欲的であった。

本研究で対象とした母親は、現在のニーズに即した信頼性の高い情報を選択するために、インターネットの情報をうのみにするのではなく、

迷った情報は子育てサークルで子育て経験豊富な他の母親に聞くという方法を用いていた。そして、様々な情報源から発信される情報が同じであるかどうかを重視していた。小林¹²⁾によると、母親たちは友達や保育者などの話し相手になれる人物を育児の情報源として頼りにしていることが明らかになっているが、本研究の参加者も同様であった。岡田ら¹³⁾は、育児雑誌やインターネット等の情報の信憑性を判定する指標として、情報の発信もとが信頼できるかどうか、と、異なる複数の発信もとが同じ情報を伝えているか、の2つを挙げている。本研究の参加者は、情報の発信元の判断に加えて、その情報の説得力に注目したり、自分の経験と照らし合わせることで納得し、情報の信頼性を判断していた。そのことが地域・家庭での信頼でき役立つ情報収集の特徴であると考えられる。こうして多くの情報を得て記憶に残る情報を増やすことで、活用できる選択肢としていた。

2) 子育てサークルの特質を生かした情報の解釈・処理

【子育てサークルで話題にしたり感想を話し合ったり助言を得ながら少しずつ解決していこうという思い】、【子育てサークルで他の母親と親しくなる過程で情報と情緒的フォローを獲得】という2つのシンボルマークには子育てサークルの特質を活かした情報の解釈・処理が示されている。

先行研究で益邑¹⁰⁾は、子育てサークルの目的を、親達が子育て仲間を得て育ち合う関係を作りながら、「子どもの遊び相手を見つける」、「遊び場を確保する」、「育児に関する情報交換をする」、「ストレス解消をする」ことであると述べている。本研究で対象とした母親は、子育てサークルを子育てに関する相談をする場とし、迷った情報について聞くことで新たな知識を得たり、方向性を定めることができていた。「情報を交換する」というサークルの目的は、情報を判断するという母親の思考に大きな影響を与えているということが明らかになった。子育てサークルでは、自分の子育てを客観的に評価できる掲示物の存在や他の母親、専門職のアドバイスによりエンパワーメントが得られる。また、

自然に子育てに関する話題を共有することで、母親同士が親しくなり、子育ての多忙さの中でも前向きに頑張ろうという気持ちが生まれる。

3) 実行後の再検討による母親の変化

【子育て状況による実行までの期間の延長や実行して上手くいかないことがあるとモチベーションが低下】は、判断後の子育てへの影響を示していた。

本研究で対象とした母親は子育てが生活の大部分を占め、子どもの様子によって日々やらなければならないことは変化していた。その中で新しく得た情報を取り入れていくのは困難であったり、実施のタイミングを計りにくい場合もある。また、実行しても子どもの反応がよくなかったり、状況が変化したりとイメージ通り上手くいくことばかりではない。しかし、モチベーションを低下させたまま子育てを行っていくことは困難なため、母親は【子育てサークルで話題にしたり感想を話し合ったり助言を得ながら少しずつ解決していこうという思い】を持ちながら、さらにいい情報を得ることや情報の妥当性を検討するという情報の解釈・処理を再び行うことになる。そして、他の母親や専門職から多様なアドバイスをもらったり、感想を話し合うことで、得た情報をより理解し自分の考えを決めることや、自分が使いやすいように構成することができ、問題解決をしようとする。また、子育ては経験の積み重ねであり、時間をかけて自分の子どもの個別性をつかんでいくものである。長期間解決できない問題を子育てサークルで自分の経験や考えとして同年代の母親に話すことで、自分の思考や実行した体験の振り返りにつなげることができていた。

このように、母親は、たとえモチベーションが低下することがあっても、代理体験や他の母親や専門職とのコミュニケーション等を通して、自身の振り返りを行いながら子育てを長い目で見て少しずつ解決していこうという肯定的な思いを持っていた。そして、その振り返りはさらなる情報収集や情報の理解につながり、母親の経験として積み重ねられていると考える。

2. 看護への示唆

子育てサークルに参加する母親が情報を判断する力を高めるための支援を、母親、母親同士、家族、地域の4つの視点から考察した。

1) 母親が子育てサークルで活発に情報交換できるための支援

母親が子育てサークルで活発に情報交換できるよう、看護職は、母親がニーズに合った情報を収集できるようにすること、情報を選択する能力を高めること、そして、子育てに伴う不安を捉え自己効力感を高めていくことが重要だと考えた。

ニーズに合った情報を収集するための支援として、看護職は、母親の思いを聞き入れながらそれぞれの母親に合った子育てサークルの紹介を行っていくことが重要である。ニーズに合ったサークルに参加することで、母親の必要とする情報がより得られやすくなる。また、子育てサークルに参加する母親の数が増加すれば、母親同士の関係性が広がり、母親がより多様な情報を収集できるようになる。家庭訪問事業等により、自治体が発行している子育てサークルを紹介しているパンフレットの活用方法を説明する等により、地域で発信されている情報を有効的に利用する力を高めるためのきっかけづくりが重要である。

小林¹²⁾は、インターネットそれ自体は約半数の母親が利用していたが、育児についての情報を得たり子どものことで相談するといった利用はほとんどされておらず、実際に母親が子育ての情報収集として信頼しているのは、友人や保育者、自分の親などであった、と報告している。また、山田¹⁴⁾による報告では、インターネットの育児カテゴリーの内容で最も多いのは、おむつ、絵本等の育児用品や学童保育等のサービスの情報であったことが示されていた。

本研究では他の母親の話や様子から焦ったり不安になることがあるというサークル活動の一面があるが、その一方で月齢や生活環境が近い子どもの発達やその母子の関係を見て、代理体験につながったり、さらなる情報収集や試行錯誤によってモチベーションは高まりを見せる可能性もあることを見出した。このように子育てサークルで他の母子の様子をどのように母親が

捉えるかは、僅かな違いであり、モチベーションが低下した時こそ子育て経験豊富な母親の励ましや、月齢が近い子や類似点がある子やその母親とのコミュニケーションを促すような取り組みが必要である。そのため、普段からかわり強い子育てサークルの職員が母親の様子に敏感に気づき、支援につなげられるようにする必要がある。相談内容によっては、保健師が相談を引き継ぎ、関係機関につないだり、母親同士のネットワークと関係を作っていく必要がある。さらに、看護職が提供した情報を母親が実際に行ってどうだったのかを聞き、共に振り返りを行い、母親が自身を見つめ直したり改善点に気づくことができるようになれば、情報を再検討する力を高められると考える。

2) 母親同士で子育てサークルの機能を高め合えるための支援

母親同士で子育てサークルの機能を高め合えるようにするには、まず、母親同士が話したり相談できる環境を整える必要がある。そして、サークルの中でメンバーが活発にコミュニケーションをとることができるよう支援していく。例えば、特にかかわりが少ない母子同士に着目し、交流し合えるプログラムを実施する等、きっかけを提供する方法を検討する。そして、専門職が継続的に介入をしなくても、母親同士が問題解決し、母親自身が主体的に活動できるように支援していくことが重要である。

3) 家族で子育てに取り組むために子育てサークルを活用した支援

本研究の対象者の中に、子育てサークル参加の動機として、家族の中に子育て相談できる者が少ないと感じたから、という母親がいた。家族内で子育ての悩みを共有することは子育ての孤立感を軽減させたり、子育てに対する家族員の役割を認識・獲得していくことになる。また、悩みを共有する中で子育ての課題が明確になり、十分に他の母親や職員と悩みを話し合うことができる。そして、家族内で母親が得た情報を分かち合い、それを活用できるように、母親の負担を軽減するよう協力することにつながる。よって、地域で看護職が行う支援として、家族内の

コミュニケーションを促すことが重要だと考えた。父親が参加できる日程でサークル活動を企画する等が考えられる。

4) 母親が子育てしやすい地域づくりのための支援

母親が子育てしやすい地域づくりのためには、母親のニーズに合わせた情報を発信するための取り組みと、地域住民の協力を得ることによる子育て支援体制づくりが重要である。

母親は地域から発信される情報を注視することによって、即時に使える情報を入手しており、社会から孤立しがちな生活だからこそ子育ての情報収集を意欲的に行っている。よって母親が子育てしやすい地域づくりのためには、母親のニーズに合った信頼できる情報を発信する必要がある。看護職は、母子保健活動を通して地域の母親のニーズを探求している。だからこそアセスメントした母親のニーズに即した地域の情報や専門的な情報を提供し、また関係機関にその地域の母親のニーズを伝え、共有できるようにする役割を果たすことができる。

母親が地域に支えられて子育ての経験を積み重ねていき、徐々に主体的な情報の判断を行えるようになるためには、各機関が連携して切れ目のないケアを提供し、母子の健康の保持増進を地域で支える支援体制づくりを行う必要がある。よって看護職は人材育成や連携の際のコーディネーターの役割を担っていく。現時点で母親とかかわりが少ない地域の子育て経験者を、子育てのサポーターとして育成していく。サポーターが今までの知識や経験を活用しながら子育ての悩みについてアドバイスをしていくことで子育ての情報の判断能力が未熟な母親を支援することができる。

また、保育園・幼稚園、民生委員、病院等の機関と協働し、地域を一つのチームとして捉え、母子保健活動を発展させていく必要がある。地域の特性を踏まえてその地域の母親のニーズを提示し、それぞれの役割においてどのような支援ができるかを明確にしていく。病院の看護職と保健師の妊娠期からの連携や、各機関へ専門的な知識を提供、関係調整等のコーディネーターの役割を通し、協働して母子の健康を守る支援体制の構築を行っていくことが、母親の主体的な判断力を育てていくための地域づくりである。

VII. 研究の限界と今後の課題

本研究では、子育てサークルに参加している母親がどのように情報の判断を行っているのかが明らかになった。本研究では対象が行政主催型子育てサークル参加者に限定されており、6名と少なく、母親によって話す内容に偏りがあったため、一般化には限界がある。そのため今後は、自主型サークル参加者も踏まえ、様々な状況にある母親を対象とした研究を積み重ねることで普遍化していく必要がある。

謝 辞

本研究を行うにあたり、多忙な中、研究にご協力賜りました対象の皆様方に心より御礼申し上げます。また、対象者の方を紹介していただきました、子育てサークルの職員の皆様方に深く感謝申し上げます。

そして、研究にあたり貴重なご助言をいただきました高知県立大学看護学部看護学科の諸先生方に厚く御礼申し上げます。

なお、本研究は、高知県立大学看護学部看護研究論文に加筆修正を加えたものである。

<引用文献>

- 1) 一般財団法人厚生労働統計協会：国民衛生の動向・厚生の指標(第60巻第9号)、一般財団法人 厚生労働統計協会、2012.
- 2) 宮崎美砂子、北山三津子、春山早苗：最新公衆衛生看護学第2版2013年版各論1、日本看護協会出版会、2013.
- 3) 鈴木庄亮、久道茂：シンプル公衆衛生学、南山堂、2013.
- 4) 竹谷雄二、前原澄子：助産学講座7 地域母子保健、医学書院、2003.
- 5) 宮崎美砂子、北山三津子、春山早苗：最新公衆衛生看護学第2版総論、日本看護協会出版会、2012.
- 6) 永田久美子：痴呆のある高齢の人々の自己決定を支える看護、老年看護学、2、17-24、1997.
- 7) 長田博泰：価値判断過程の解析と形式化、社会情報、13(2)、79-98、2004.
- 8) 内ヶ島伸也、蒲原龍：認知症高齢者の日常生活ケアにかかわる意思決定能力の特徴と

その関連要因の検討、北海道医療大学看護福祉学部学会誌 7(1)、13-23、2011.

- 9) 圓岡偉男、黒澤周生：意思決定の基本構造に関する一考察、東京情報大学研究論集、15(1)、49-61、2011.
- 10) 益邑千草：地域における育児グループの育成・支援の在り方、共栄学園短期大学紀要、20、153-169、実教出版株式会社、東京、2004.
- 11) 山浦晴男：質的統合法入門 考え方と手順、医学書院、2012.
- 12) 小林真：インターネットの利用母親の育児ストレスに及ぼす緩和効果、富山大学教育学部紀要、58、85-92、2004.
- 13) 岡田正、高橋参吉、藤原正敏：ネットワーク社会における情報の活用と技術三訂、2001.
- 14) 山田隆：子育てにおけるインターネット利用～携帯電話による子育てホームページ、東海女子大学紀要、25、151-162、2005.

<参考文献>

- ・NPO法人子育てひろば全国連絡協議会、財団法人児童育成協会（こどもの城）：地域子育て支援拠点事業実施のご案内、厚生労働省雇用均等・児童家庭局総務課少子化対策企画室、2007.
- ・沼田加代：育児グループの形態別にみた育児不安と育児グループの効果に関する検討、群馬保健学紀要、25、15-24、2004.
- ・佐野麻衣：母親にとって育児グループ活動の場はどのような場であるかーある育児グループ活動に参加している母親のインタビュー分析からー、日本看護学会論文集第36回地域看護、216-218、2005.
- ・清水美知子：育ち合いの子育て支援活動～親子ひろば「はらっぱ」を事例として～、関西国際大学研究紀要、9、109-125、2008.